The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複数言語環境で育つ子どものことばの習得と教育に関すること
Author(s)	櫻井, 千穂
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95462
rights	
Note	

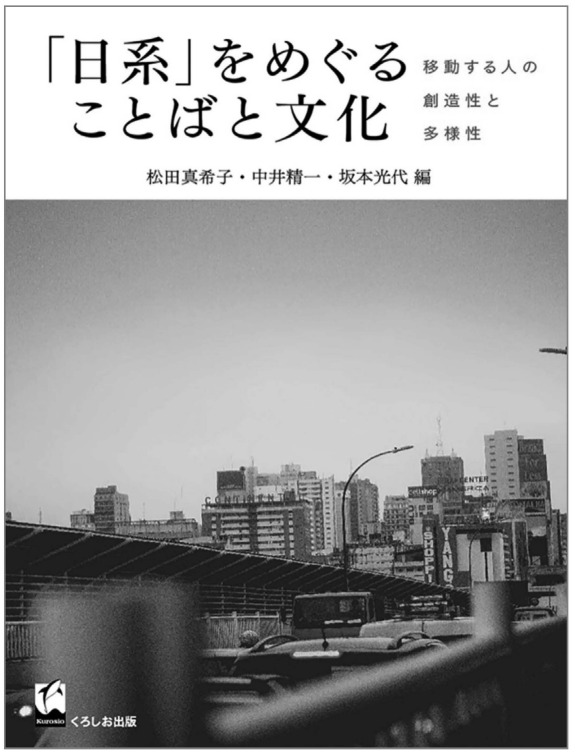
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

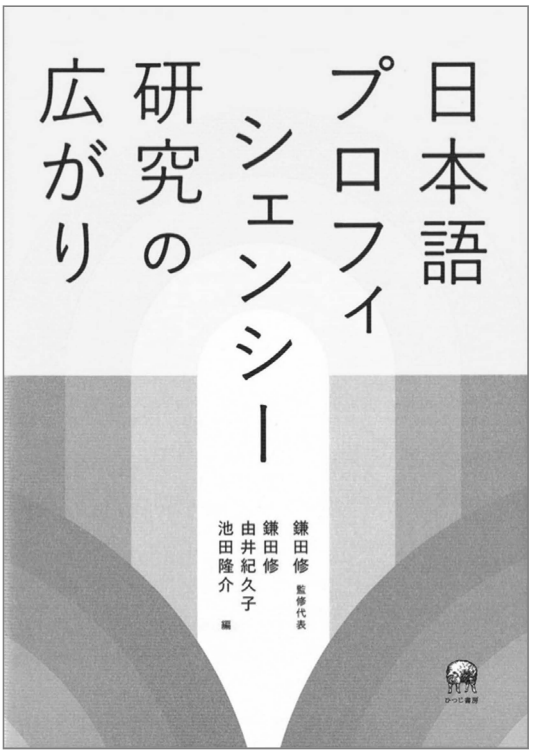
The University of Osaka

(1)齋藤ひろみ編(2022)
『外国人の子どもへの学習支援』
金子書房

(2) 西川朋美編(2022)
『外国につながる子どもの日本語教育』
くろしお出版



(3)松田真希子・中井精一・坂本光代編(2022)
『「日系」をめぐることばと文化:移動する人の創造性と多様性』
くろしお出版



(4)鎌田修・由井紀久子・池田隆介編(2022)
『日本語プロフィシェンシー研究の広がり』
ひつじ書房

近年、日本でも学校や社会で使われる言語（日本語）と家庭で使われる言語（母語・継承語）が異なるといった、複数言語の環境で育つ子どもたちが増えています。みなさんの中にも自分自身がそういう環境で育ったという人もいるでしょう。このような子どもたち（人たち）は、日本語のほかに複数の言語が使えて複数の文化に日常的に触れられる可能性があるわけですから、本来ならとても豊かなバックグラウンドを持っていると言っていいはずです。ですが、日本の学校は基本的に日本語を母語として、日本文化を背景に持つ子どもたちへの教育を想定してシステム化されています。学校のルールや勉強する教科の内容、教科書等といったあらゆるものが日本語のみを母語とする子どもを対象に作られています。複数言語の環境で育つ子どもたちは、こういった学校文化の中でマイノリティの立場になってしまい、システムとのミスマッチにさらされるためにさまざまな困難に直面しています。

このような問題は、私がこの分野の研究や教育に携わり始めた20年くらい前でも、すでに社会的課題として認識されてはいましたが、近年はその関心がさらに高まってきています。日本語教育の分野において、成人になってから第二言語として日本語を習得しようとする人たちへの教育に関する研究蓄積はあります。しかし、発達段階の途中を複数言語環境で過ごす子どもへの教育というテーマについては、それとは異なるポイントがたくさんあるため、今後ますます、さまざまな角度からの研究や実践が必要となってくるのです。

ここに挙げた４つの書籍はすべて2022年に発行されたものですが、複数言語環境で育つ子どものことばの習得と教育に関するテーマで以下の論考を寄せさせていただきました。

（1）「臨時休業下におけるオンライン学習支援ー教員養成の視点から」（pp.50-57）
（2）「子どもの日本語力を評価する」（pp.43-59）
（3）「CLD児のことばの可視化と全人的教育」共著:中島永倫子・櫻井千穂（pp.119-132）
（4）「CLD児の言語能力評価、再考ー全人的発達を目指して」（pp.405-418）

（1）はコロナ禍の学校休業中に大学生が主体となって行った、複数言語環境で育つ子どもたちへのオンライン学習支援の取り組みについてまとめたものです。（2）（3）（4）は、このような子どもたち（文化的言語的に多様な子ども（Culturally Linguistically Diverse Children）の意味でCLD児という用語を使用）のことばの力をどのように捉えるべきかといった言語能力評価のあり方や子どもが実際に産出した言語データについての論考です。

子どもへの複数言語教育、日本語教育に携わりたいとか、この分野の研究に少しでも興味がある人は手にとってみてもらえると嬉しいです。新しい研究のテーマや支援のヒントが見つかるかもしれません。